

## ドイツの哲学研究とキリスト教

水落 健治

1993年4月より2年間、私は在外研究の機会を与えられ、ドイツ、ミュンヘンのルートヴィヒ・マクシミリアン大学（ミュンヘン大学）第10学部のProf. Beierwaltesのもとで客員研究員としてヨーロッパ中世哲学の研究に携わった。2年間の生活を通して様々なことを感じ、また考えさせられもしたが、一番痛切だったのは、研究の方法と背景がドイツと日本とでこれほどまでも違うのか、ということである。ゲーテ・インスティトゥートでの5カ月間のドイツ語研修を経て大学に通い始めて以来帰国するまで、私はずっとこのことを考え続けていたと言ってよい。

こんなことがあった。----昨年  
の冬学期、トマス・アキナス  
『存在と本質について』De Ente  
et Essentia のゼミに出たときの  
ことなのだが、話が「笑い」の話  
になったので、私がアンリ・ベル  
クソンの著書『笑い』のことを話  
した所、ゼミの指導にあたって  
いた助手も含めて、出席していた  
ドイツ人の誰もこの書物のことを  
知らなかったのである。もちろん  
すべての出席者はベルクソンを現  
代フランスの哲学者として知って  
はいたのだが、その彼が書いた、  
日本では一番通俗的な著書をほと  
んどドイツ人が知らなかったこと  
は、私にとっては予期せぬ驚きで

あった。

そして私は、ちょうどこれと逆のことを、キリスト教について経験したのがある。

私を招いてくれたProf. Beierwaltesは、新プラトン派の研究者であり、しかも新プラトン派の哲学をキリスト教神学との関わりで捉えているので、Prof. の話の中に相当程度キリスト教の話が出てくることであろうことは、私も当初から予測していた。しかし、いざ授業に出てみると、その程度は私の予測を遥かに超えるものであり、しかもほとんどは、私の知らないことであった。

ヘーゲルの『精神現象学』の構造がアウグスティヌスの「信仰の知解」の思想を下敷きに行っていること、ハイデッガーの『存在と時間』がトマス・アキナスの「存在」の思想との対決の結果成立したこと----この類の話は講義の中に余談として無数に出てきたし、また、後期新プラトン派の哲学者プロクロスのゼミでは、19世紀イギリス----特にケンブリッジ----のプラトン研究の隆盛を当時イギリスで主流であったキリスト教神学（三位一体論）への反動として捉える詳細な報告を行った学生もいた。そしてこのような話題は、単にProf. Beierwaltesの授業のみならず、ドイツ滞在の期間中、中世ラテン文献学の講義など、至る所で耳に入って来ていた。

このような経験を通して、私は、ドイツの哲学研究が日本のそれとかなり根本的な所で違っていることを身にしみて感じさせられた。

また、ドイツのキリスト教についても、これが日本人の理解する---アメリカ的---キリスト教と本質的な所で違っていることを強く思わしめられた。

私の哲学研究もキリスト教理解も、何か今、全くの出発点に戻ってしまったような気がしている。とはいえ、このような話を聞いて、目から鱗が落ち、はじめてヘーゲルやハイデッガーが分かったような気がしているのも事実なのだが..

(みずおち けんじ

一般教育部教授)